

謝罪の手紙文の中に見られる敬語動詞の誤運用

－ 中国人学習者の場合 －

宮田 剛章

1. はじめに

非漢字圏出身者の漢字の習得以外に日本語学習が抱える問題として挙げられるものの中に、助詞・助動詞と敬語であると答えるのが一般的であるとされており、その中のひとつに敬語がある。敬語とは、話し手と聞き手、および話題の人物との間の様々な関係に基づいてことばを使い分け、その人間関係を明らかにする表現形式のことである。そうした中で、平林他(1988)は、敬語の学習が難しいのは文法形式によるのではなく、複雑な人間関係を考えた上で一つの適切な表現形式を選ばなければならないからである、としている。確かに敬語を含め待遇表現を考慮した談話構築は、どのレベルの日本語学習者にとっても難しい。待遇表現の使用には語彙の適切さ、文法的な形の正しさなどの能力が備わっているだけでなく、いついかなる場面で、どんな相手に対してどのように待遇表現を用いるかという、場面の正確な判断力が伴わなければ不十分である(水谷 1989)。熊井(1992)によると、通常不適切な行動は、文法的な誤りと違って、間違いであっても、そのように認識されにくいだけに、態度やパーソナリティーの問題と結び付けられる可能性が高く、対人関係に深刻な摩擦を引き起こす危険性も少なくないであろう、としている。立松(1989)は、適切な使用を伴わなければいかに知識や能力(competence)があっても、実際の運用(performance)は不成功に終わるだろうと述べている。それと同時に、中には待遇表現が十分でなく、意図せず誤解を生ずる恐れのある学習者がいるため、どのように彼らを受け入れていくか、について考えていく必要もある。敬語はそういった待遇表現の一部であり、日本語学習者にとって避けては通れない関門であろう。

上述したことは、筆者を含め教師側からみた敬語教育の意見である。一方、実際の教育現場でも中・上級学習者の敬語への関心は高い。敬語が日本語学習者にとって困難であると認識するのはある程度意思疎通が可能になってくる頃で、円滑な人間関係を維持するための手段として敬語の運用を高めたいと考えている学習者は多いようである。以上より、日本語教師は文法面だけではなく敬語を含めた待遇表現もそのような意欲的な学習者の要望に応じて適切な指導をしていかな

なければならない。しかし敬語学習の問題点は分かっているながらも、現実的にはその解決を教師の教授経験や学習者の直感に依るところが大きい。

そこで日本語学習者がどれほど敬語を習得しているか、何が難しいかを実証的に調査および研究を行っていく必要があるだろう。しかしながら敬語習得に関する先行研究は筆者の知る限り非常に少ないのが現状である。近年敬語習得の実証研究がわずかに報告されている。学習者の敬語動詞の言語能力については宮岡他(2000)や宮田(2001, 2002a, 2002b, 2002c)が、また敬語動詞の正運用については宮田(2002c)が報告しているに過ぎず、さらなる習得研究の報告が望まれている現状である。

2. 目的

本稿は20代から30代の中国人日本語学習者を対象に、謝罪を促す手紙文における敬語動詞の誤運用について調査し、敬語運用において何が困難であるかを定量・定性的に分析していくことである。

3. 調査・分析方法

調査協力者は中国語を母語とする20代から30代の北京官話を母語とする中国人日本語学習者¹⁾30名(男性9名, 女性21名)で、調査時期は2001年2月である。初めにアンケートにより、性別、母国、母語、学習歴、日本滞在期間を調べ、続いてタスクを与えた。タスクは手紙文の作成である。この際両タスク共に解答時間・手紙文の字数は問わなかった。手紙文に関しては想像を豊かにして文章が1, 2文で終わらないよう指示をした。

手紙文作成の目的は調査協力者のレベル分け²⁾と敬語動詞の誤運用の調査である。本稿でいう誤運用とは、学習者が犯した敬語動詞の誤用のために、手紙文の文脈の中で敬語使用が成立しないことを指す。因みに手紙の題目は「あなたは学校でA先生とよく話をするぐらい親しい関係です。あなたはある日、A先生の家へ行きました。そのとき、A先生から高価な皿を借りました。しかし、あなたはそれを割ってしまいました。あなたはA先生にすぐに会うことができません。A先生に手紙を書いてください。」である。

手紙文に出現した敬語動詞の誤用について説明する。表1は謝罪の手紙文で出現した敬語動詞の誤用の分類を示したものである。誤用分類において、菊地(1997)を参考に作成した。

表 1 手紙文における誤用の分類

誤用の種類	説明と例
文法的誤用（尊敬語・謙譲語・丁重語・謙譲丁重語 ³⁾ ）	敬語動詞の文法的な誤り，授受表現などの語選択が正しくないもの，また，語彙的な誤用も含める．例)「先日家へ <u>ごちそしてくださ</u> いって…」
社会言語的誤用〔人間関係での誤用（尊敬語・謙譲語・丁重語・謙譲丁重語）、および関係者不在での誤用（謙譲語・謙譲丁重語のみ）〕	文法的にも表記も正しいが，待遇上正しくないもの．例)「先生の高価な皿を借りられました。」 関係者に配慮を与える性質を無視して，関係者が不在の文で用いられているもの．例)「先生にお謝りします。」

文法的誤用とは，敬語動詞の文法的な活用や接続，授受表現などの語選択が正しくないものを指す。人間関係での誤用とは，文法的にも表記も正しいけれども，待遇上正しくないものを指す。関係者不在での誤用とは，謙譲語と謙譲丁重語だけだが，関係者に配慮を与える性質を無視して，関係者が不在の文で用いられているものを指す。人間関係での誤用と関係者不在での誤用は人物や場面を考慮して使用しなければならないので，社会言語的誤用とする。どちらの誤用にせよ，誤用判定は敬語の性質上，前後の文脈を考慮した。

敬語動詞の誤用率は A/B （ A は手紙文に出現した敬語動詞の誤用頻度， B は手紙文中において出現した全動詞数）とした。誤用率を定義するとき，単に誤用数にすると文の長さによる個人差が生じるためである。また B を敬語動詞の出現数ではなく全動詞数にした理由の1つに，一般に談話が展開すると共に述語動詞や従属節での動詞が増加するため，文字数や句・節・文の数に代わって談話の長さの指標となりうるということがある。またもう1つの理由として，敬語動詞よりもむしろ普通語動詞が使われるべきところに敬語動詞が使われるために誤用となった場合も見られたため，敬語動詞の出現数を基本にした変量では不十分なことがある。敬語化が起こる動詞と起こらない動詞も全て学習者にとっては敬語化の対象となりうるのである。複合動詞については頻度数を1としてカウントした。基本的に慣用句はカウントをしないが，「申し訳ありません」と「申し訳ございません」のように普通語と敬語が対になっているものはカウントした。以上より「文法的誤用」と「社会言語的誤用」を2グループとし，誤用率を算出した。

検定法について説明をする。誤用率を変量とし，「文法的誤用」と「社会言語的

誤用」の2グループに対し、ノンパラメトリック検定の1種である Wilcoxon の符号付き順位検定を採用した。続いてそれぞれの誤用グループにおいて、多重対応分析を用いて敬語動詞の下位分類の類似性を分析した。また定量分析だけではなく、定性的にも頻度数を挙げ、どのような誤用形式が出現したかを提示し、分析・考察していく。

4. 結果と考察

4-1 で定量分析、それにつづいて 4-2 定性分析に進めていく。

4-1 定量分析

4-1-1 文法的誤用と社会言語的誤用

まず検定を始める前に、表 2 に文法的誤用と社会言語的誤用の記述統計および Shapiro-Wilk の予備検定の結果を示す。

表 2 文法的誤用と社会言語的誤用の記述統計および Shapiro-Wilk の検定

	文法的誤用	社会言語的誤用
平均点	0.078	0.018
標準偏差	0.093	0.053
最大値	0.300	0.267
最小値	0.000	0.000
歪度	1.036	3.894
尖度	0.119	17.051
Shapiro-Wilk の検定	0.000***4)	0.000***

平均点だけを見ると、文法的誤用が社会言語的誤用よりも高く、中国人学習者は文法的な誤用を犯しやすいと推定できる。次にグループ間の差を見る検定を行う前に、予備検定として Shapiro-Wilk の検定を行った。文法的誤用・社会言語的誤用共に、0.1%水準で棄却されたことから、両群とも正規性であることが疑わしい。また分布の左右非対称性の程度（つまり分布の歪み具合）を示す歪度と分布の尖り具合を見る尖度をそれぞれ見ても、文法的誤用の尖度以外はすべて1を超えていて、定性的に正規分布でないことが分かる。

そこで、文法的誤用と社会言語的誤用の2つの対応グループに対し、ノンパラメトリック検定である Wilcoxon 符号付順位検定を行い、表 3 にその結果を示す。

表3 Wilcoxon 符号付順位検定：文法的誤用と社会言語的誤用

社会言語的誤用－文法的誤用	N	順位和	平均ランク
負の順位	14	132.50	9.46
正の順位	3	20.50	6.83
同順位	13	/	/
合計	30	/	/
Wilcoxon の符号付き順位検定	0.008**5)		

1%水準で有意であることから、社会言語的誤用と文法的誤用とは異なる母集団に属すると考えられる。また「社会言語的誤用－文法的誤用」の順位和を見ると分かるように、負の順位が正の順位よりも大きいことから、社会言語的誤用よりも文法的誤用の方が大きいといえる。つまり中級中国人学習者にとって、手紙文における敬語動詞の運用において、社会言語的な側面よりも、文法的な側面が困難であることがいえる。

4-1-2 誤用の観点からの類似性

次にそれぞれの誤用を敬語動詞として下位分類し、誤用の観点からその類似性を多重対応分析を使って分析を行った。多重対応分析とは数量化3類の一種で、名義データを数量化する手法である。図1は、手紙文に見られる敬語動詞別・誤用別に多重対応分析を行った結果を、また表4は図1のプロットの形と意味、および座標とプロット数を示している。

図1 手紙文に見られる敬語動詞別・誤用別多重対応分析

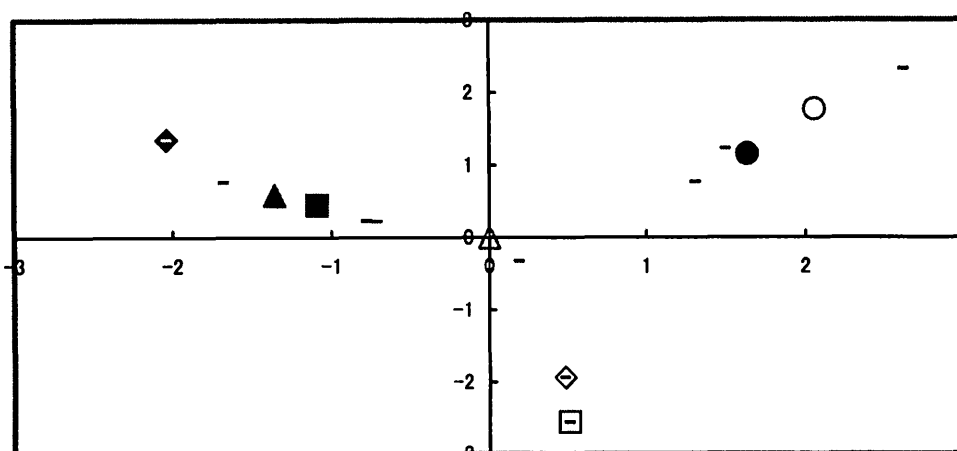


表4 プロットの凡例, およびその座標

図1のプロット	意味	座標 (X, Y)	プロット数
●	尊敬語の文法的誤用	(1.636, 1.156)	/
○	尊敬語の社会言語的誤用	(2.058, 1.774)	/
■	謙譲語の文法的誤用	(-1.089, 0.447)	/
□	謙譲語の社会言語的誤用	(0.513, -2.559)	/
▲	丁寧語の文法的誤用	(-1.357, 0.580)	/
△	丁寧語の社会言語的誤用	(0.000, 0.000)	/
◆	謙譲丁寧語の文法的誤用	(-2.037, 1.348)	/
◇	謙譲丁寧語の社会言語的誤用	(0.484, -1.937)	/
—	調査協力者 (中国人学習者)	(0.186, -0.317) (-0.785, 0.228) (1.309, 0.769) (-1.681, 0.762) (0.513, -2.559) (-2.037, 1.348) (-0.710, 0.216) (0.484, -1.937) (1.497, 1.230) (2.619, 2.317)	11 6 3 2 2 1 1 1 1 1 1

表4を参照しながら図1を見ると、謙譲語・丁寧語・謙譲丁寧語の文法的誤用が近接、謙譲語・謙譲丁寧語の社会言語的誤用が近接、そして尊敬語の文法的・社会言語的誤用が近接しているのがわかる。このことから謝罪の手紙文における敬語動詞の文法的誤用出現パターンという観点から、従来の謙譲語同士が類似し、社会言語的誤用出現パターンからは謙譲語・謙譲丁寧語が類似している。また尊敬語の文法的誤用と社会言語的誤用の出現パターンも類似している。

それに対し、謙譲語・丁寧語・謙譲丁寧語の文法的誤用と謙譲語・謙譲丁寧語の社会言語的誤用と尊敬語の文法的・社会言語的誤用の3つの塊が離れていることから、誤用の出現パターンが異なっていることがいえる。一方それに伴って、中国人学習者のプロットが、尊敬語の文法的・社会言語的誤用がある象限と謙譲語・丁寧語がある象限に集中しているのが分かる。

表5に敬語動詞の誤用を犯した調査協力者の数を示した。これは手紙文で1回でも敬語動詞の誤用を犯せば、1人と数え、2回以上の誤用があっても1人とした。表5からも従来の謙譲語の誤用を犯している学習者は尊敬語の誤用を犯している学習者よりも多いことが分かる。

表5 誤用を犯した調査協力者の数

意味		誤用を犯した調査協力者の数 (人)	
尊敬語	尊敬語の文法的誤用	4	6
	尊敬語の社会言語的誤用	2	
従来の謙譲語	謙譲語	謙譲語の文法的誤用	16
		謙譲語の社会言語的誤用	
	丁重語	丁重語の文法的誤用	
		丁重語の社会言語的誤用	
	謙譲丁重語	謙譲丁重語の文法的誤用	
		謙譲丁重語の社会言語的誤用	

4-2 定性分析

4-1 では誤用率を変量として、誤用種の差、および誤用パターンの類似性を分析してきた。ここでは、質的に敬語動詞の誤用を分析していく。

4-2-1 文法的誤用

まず表3の結果より、社会言語的誤用よりも文法的誤用が大きいことが明らかになった。そこでどのような文法的誤用が出現したのか、主な項目を取り上げる。

(i) 「借りる」と「貸す」の混用

- ・皿をお借しになりました。(皿をお貸しになりました.)
- ・皿を借りてくださいました。(皿を貸してくださいました.)
- ・皿を借りしていただいて…(皿を貸して下さって…)
- ・借りていただいた皿…(貸して下さった皿…)
- ・借っていただいて…(貸して下さって…)

これは中国人学習者が犯しやすい誤用の1つで、文法的誤用全21件中5件見られた。これは「借りる」と「貸す」を区別しない中国語(中国語では共に「借(jiè)」)からの母語干渉だと考えられる。

(ii) 「お」の過剰般化

- ・お過しております。(過しております.)
- ・お割ってしまいました。(割ってしまいました.)

- ・御失礼しておりました。(失礼しておりました。)
- (iii) 「お」の簡略化
- ・招きしていただきました。(お招きしていただきました。)

一般的に「お／ご」の用法もまだ定着していないようである。本稿で用いたデータでは「お／ご」の混用と「ご」の過剰般化および簡略化は観察されなかった。

(iv) 動詞の活用の問題

- ・ごちそしてくださいって…(ご馳走してくださいって…)
- ・先生からお借りった…(先生からお借りした…)
- ・気をおつきになってください。(気をお付けになってください。)
- ・いわせていただけます。(言わせていただきます。)
- ・先生にさしあがます。(先生に差し上げます。)
- ・今日お返しなりに…(今日お返ししに…)
- ・お宅へうかがいて…(お宅へ伺って…)
- ・さそていただきますが…(?)
- ・お伝いいたします。(お伝えいたします。)

動詞の活用や接続の問題は文法的誤用の大半を占めており(21件中9件)、主な文法的誤用である。中級学習者はまだ十分活用面で定着していないことがいえる。

(v) 終助詞の簡略化

- ・私を許していただけません。(私を許していただけませんか。)

(vi) アスペクトの問題

- ・この間はどうもお世話になっておりました。(この間はどうもお世話になりました。)

その他に終助詞の簡略化やアスペクトの問題があったが、頻度が少なく他の文法的誤用に比べ深刻なものではないようである。

4-2-2 社会言語的誤用

次にどのような社会言語的誤用が出現したかを見る。

(i) ラレル形の誤用

- ・皿を借りられました。(皿をお借りしました.)
- ・きのう借りられたお皿…(昨日お借りしたお皿…)
- ・返されます。(お返しします.)

尊敬語の添加形式⁶⁾の1形式であるラレル形は交替形式に比べ敬語化する上で容易である。しかし話者やウチ・シタの人物に対して使うことができないという規範に反して、8件中3件産出されている。

(ii) 関係者不在の誤用

- ・先生のお宅へ行ってお謝りします(先生のお宅へ行って謝ります.)
- ・お謝りいたします。(謝ります.)

謙譲語を使用するとき、関係者に当たる人物がいなければならない。この場合「お謝りする」だと、先生に代わって、あるいは先生のために誰かに謝するという機能に捉えられる⁷⁾。しかし8件中2件規範に反した産出が見られた。これは共通して「謝る」という動詞で使われていた。

(iii) 授受表現の不適切性

- ・ごちそうなさいました。本当にありがとうございました。(ご馳走してくださいました。本当にありがとうございました.)

(iv) その他

- ・先生にご迷惑をおかけになって…(先生にご迷惑をおかけして…)
- ・お体にご注意してください。(お体にご注意ください.)

授受表現の不適切性は本稿ではあまり見られなかった⁸⁾。ご馳走なさるという文の後に感謝を表示する「本当にありがとうございました」が出現していて、その前文が「ごちそうしました」あるいはそれを単に敬語化した「ごちそうなさいました」だけでは不十分で、恩恵の機能を持つ授受表現にまでしなければならぬ。完全な誤用とは言い難いが、前後の文脈では不適切と判断した。

その他の誤用は「お／ご～になる」と「お／ご～する」の機能が過剰般化されたために引き起こされたものであるが、これらの形式による誤用はそれぞれ1つずつしか出現しなかった。

このように文法的、社会言語的な側面で手紙文に出現した誤用を分析してみると、それぞれのカテゴリーの中でも誤用の語形が異なり、学習者の敬語動詞の誤用が出現する要因が複合化していることが考えられる。

最後に表6に謝罪の手紙文で出現した敬語動詞の誤用出現数とそれぞれの誤用

ケースをまとめた。

5. まとめ

本稿では中級中国人学習者を対象に手紙文に出現した敬語動詞の誤運用という側面から定量・定性分析により敬語動詞の習得状況を調査した。

その結果定量分析により、社会言語的誤用よりも文法的誤用が多いことが明らかになった。これにより、中級中国人学習者は社会言語的側面よりも文法的な側面での敬語習得が遅れていることがいえる。これは宮田（2001, 2002b）での文法性判断テストでの調査結果に一致し、第二言語習得で定義される言語能力の欠如に起因するものと考えられる。さらに数量化法の結果、誤用出現パターンは尊敬語（文法的・社会言語的誤用）と従来の謙譲語（文法的誤用）と従来の謙譲語（社会言語的誤用）の3つに区分され、区分間では異なった誤用パターンであるが、区分内において同じ誤用パターンが起きていることが分かった。これは、中級中国人学習者には主に3つの異なった誤運用の様式があることを示唆している。

また、文法的側面と社会言語的側面で手紙文に出現した誤用を定性分析してみると、全体的にそれぞれのカテゴリーの中で誤用の形態が異なっている。文法的側面では貸すと借りるの混用、敬語を表す接頭辞「お」の過剰般化・簡略化、および動詞の活用面での誤用が目立った。また社会言語的側面では、ラレル形の誤用、関係者不在の誤用、および授受表現の誤用が見られた。

6. 今後の課題

今後の課題として以下に項目を挙げる。

- (1) 調査協力者のレベルを中級、母語を中国語に限定しているため、計量的測定は行ってはいるものの、完全な一般化が出来ない。今後他の属性でも同様に敬語の誤運用を調査する必要がある。それと同時に定性分析により明らかになった誤用種についても計量的に綿密な調査をしなければならない。
- (2) 本稿は誤運用について主に研究したに過ぎない。誤用分析だけに留まらず、正運用をも含めた中間言語研究に発展させる余地が残されている。
- (3) 敬語動詞の出現を促すため、本稿で取り上げた題目は謝罪でしかも相手が先生という設定で行われた。談話は会話と違い手紙文で、書くタスクということでセルフモニタリングの余地も与えた。しかし謝罪でも異なった設

定、または謝罪以外の命題題目やコンテキストの設定により、異なった敬語の誤運用が考えられる。今後他の条件による談話を抽出しなければならないだろう。

註

- 1) 本稿の対象となった中国人話者は、日本語学校や大学の留学生センターや別科で既にフォーマルインストラクションを受けた中国北中部出身者のみに厳選し、香港などの広東話話者、政治社会体制が異なる台湾出身者、吉林省出身者のハングル話話者、チベット話話者は含めていない。平均日本滞在期間は25.53ヶ月、平均日本語学習期間は33.53ヶ月である。
- 2) ACTFL 言語運用基準の書く技能の汎言語的記述は、大きく初級一下／初級一中／初級一上、中級一下／中級一中／中級一上、上級／上級一上、超級の9段階からなっている。初級一下から超級まで1から9までの点数を割り振り、2人の評価者（日本語母語話者の日本語教師）により調査協力者の手紙文を評価した。2人の評価の点差が0、または1なら、2人の評価点の和を2で割る。点差が2以上なら、3人目の日本語教師により評価され、前の2人が行った評価のうち点数が近いものとの点数と平均をとり、それを評価とする。例えば、評価者Aと評価者Bがそれぞれ4点と6点を付けたとする。この場合2人の点差が2点なので、3人目の評価者Cも評価に参加しなければならない。Cが7点を付けたら、Aの4点よりもBの6点のほうが近いので $(7+6) / 2 = 6.5$ 点とする。Cが3点ならAの4点の方が近いので $(3+4) / 2 = 3.5$ 点とする。Cが5点ならちょうどAとBの評価点の平均なので、そのまま5点とする。この評価法により、4以上（「中級一下」以上）7未満（「上級」未満）の範疇にある学習者を中級日本語学習者と見なし本稿の対象とした。

調査協力者のレベル分けに参加した日本語教師は3名で、3名ともACTFLガイドライン利用の訓練を受けたことはなく、ACTFL言語運用基準を参考に記述に近いものを採用するよう指示した。訓練を受けていないということで信頼性の問題が浮上したため、初めの2名の評価者についてアルファ係数を算出した。 $\alpha = 0.9385$ と高い数値になり、作文評価の信頼性の高さ（つまり、評価者の評価の一致率が高いこと）を確認することができた。

また手紙文の題目が超・上級レベルまで判定可能な理由として、作文でも手

紙文であることと「謝罪」を促す題目になっていることがある。上級学習者以上なら単なる謝罪で終わらず理由付けや心情などを段落レベルで叙述・描写することが期待でき、超級学習者ならさらに読み手の「A 先生」への配慮（敬体・常体のシフト調整や敬語使用など）を観察することができる。また謝罪という性質上、非言語行動を重視し、言語行動に表出しにくくなるという恐れもあることから、極端な設定（「ちょっと足を踏んでしまった」とか「車で人をはねた」など）を避けた。

- 3) 丁寧語と謙譲丁寧語という用語は、それぞれ菊地氏のいう「謙譲語 B」と「謙譲語 AB」、蒲谷氏らのいう「丁寧語」と「尊重丁寧語」に相当する。詳しくは菊地（1997）、蒲谷ほか（1998）を参照。
- 4) ***は 0.1%水準で有意であることを示す。
- 5) **は 1%水準で有意であることを示す。
- 6) 林（1999）によると、添加形式とは「(お/ご) ~になる・する」や「~される」など動詞を活用させて添付することで敬語化できる形式を指す。交替形式とは「いらっしゃる」や「召し上がる」など普通語を敬語化するとき、語そのものを変えなければならない形式を指す。
- 7) 蒲谷（1992）が主張する「(お/ご) ~する」の機能の観点からみると、「謝る」は関係者への恩恵を与える機能が付加されるものと考えられる。
- 8) 通常の敬語動詞の運用と違い、授受が付加すると機能がさらに複雑になるため、回避が起こっている可能性が考えられる。

参考文献

- 蒲谷 宏（1992）『「お・ご～する」に関する一考察』『辻村敏樹教授古稀記念 日本語史の諸問題』141-157, 明治書院
- 蒲谷 宏, 川口義一, 坂本恵(1998)『敬語表現』大修館書店
- 菊地康人(1980)『「上下待遇表現」の記述』『国語学』122, 39-54
- _____ (1997)『敬語』講談社
- 熊井浩子(1992)「留学生にみられる談話行動上の問題点とその背景」『日本語学』11-13, 72-80
- 柴田 武(1988)「日本人の敬語」『国文学-解釈と教材の研究』33-15 学燈社
- 立松喜久子(1989)「外国人学習者の待遇表現のレベルの適正さについて」『日本語教育』69, 36-46

- 永田 靖, 吉田道弘(1997)『統計的多重比較法の基礎』サイエンティスト社
- 野元菊雄(1990)『敬語教育の基本問題(上)』大蔵省印刷局
- 林 四郎 (1999)「敬語の役目はなくなるならない」『月刊言語』28-11(338), 34-40
- 平林周祐, 浜由美子(1988)『外国人のための日本語例文シリーズ 10 敬語』荒竹出版
- 牧野成一(1995)『ACTFL - OPI 試験官養成用マニュアル』The American Council on the Teaching of Foreign Language
- 水谷 修(1992)『敬語教育の基本問題(下)』大蔵省印刷局
- 水谷信子(1989)「待遇表現指導の方法」『日本語教育』69, 24-35
- 宮岡弥生, 玉岡賀津雄(2000)「中国人日本語学習者の敬語習得」『平成 12 年度日本語教育学会秋季大会予稿集』134-141, 10 月 8 日, 名古屋外国語大学
- 宮地 裕(1968)「現代敬語の一考察」『国語学』72, 92-98
- _____ (1982)「待遇表現」『日本語教育事典』226-227 大修館書店
- 宮田剛章(2001)「中級日本語学習者の敬語運用 - 尊敬語の場合 -」『平成 13 年度日本語教育学会第 1 回研究集会予稿集』15-16, 6 月 3 日, 名古屋大学
- _____ (2002a)「中級日本語学習者の誤用訂正能力 - 謙譲語(動詞)の場合 -」『第 9 回社会言語科学学会大会予稿集』62-67, 3 月 3 日, 千葉大学
- _____ (2002b)「中級日本語学習者の敬語動詞の誤用訂正能力 - 丁寧語(動詞)の場合 -」『南山日本語教育』第 9 号, 南山大学大学院外国語学研究科
- _____ (2002c)「学習期間の長さが敬語習得に及ぼす影響 - 滞在期間・学習期間・ライティング能力からみた敬語習得 -」『平成 14 年度日本語教育学会春季大会予稿集』167-172, 5 月 26 日, お茶の水女子大学

(みやた たけあき・東京都立大学大学院生)